

# 私が戦闘機乗りになると決めたとき



五空将 麗澤大学特別教授 織田邦男

## なんで靖国参拝に反対するんじやろう… 織田邦男

筆者は自衛隊に約40年奉職して16年前に退官した。F4戦闘機操縦者として防空の最前線で勤務し、日本の空の守りに従事してきた。なぜ戦闘機操縦者の道を目指したか。男子は、一度はパイロットに憧れるという。そういう面もあるが、叔父の影響が何より強い。

その叔父とは父の9歳年下の弟のことである。彼は17歳で帝国海

軍に志願し海軍パイロットになった。だが、昭和18年11月20日、太平洋のギルバート諸島上空にて散華された。享年21。11月20日は、米軍によるマキン・タラウへの上陸作戦が始まる前日であり、ギルバート諸島上空で大規模な日米空中戦があった。筆者はもちろん一度もお会いしたことはない。だが同じ空を戦場とする先輩でもあり、とても身近に感じる存在であ

り続けている。

子供の頃、益と正月は愛媛県大三島にある父の実家に帰省するのが我が家の年中行事だった。その時、広い客間の中央に飛行服姿の叔父の遺影が飾ってあった。子供心に興味があったが、その遺影が誰で、珍しい服装が何を意味するか誰も語ろうとしなかった。またなんとなく聞けない雰囲気があった。今から思えば皆、叔父の戦死

がよほど辛かったのだろう。

ある時、写真が叔父であり、あの服装が飛行服であることを母がこっそり教えてくれた。筆者は幼いながら、「僕もパイロットになるろう」と奮い立った。今思えば、これが戦闘機パイロットを天職に選んだ瞬間だった。

筆者はその後、実際に航空自衛隊で戦闘機パイロットとなり、約3800時間の飛行時間で空の任務を終えた。幾度も「ヒヤリ・ハット」する経験をした。空を戦場にする天職の宿命であるが、その



筆者の叔父の写真

都度、何とか切り抜けてこられた。これも叔父に守られてきたからと勝手に思っている。戦死することも、殉職することもなく天職を全うできたことを心から感謝している。

母は広島県京市出身である。そのせいか、江田島にある海軍兵学校のことをよく聞かされた。生徒が漂々しくて格好良かったと語っていた。乙女心に憧れの存在だったのかもしれない。防衛大学の

存在を知らされたのも、母からだ。その後、防衛大学校に入つて、戦闘機操縦者になることが筆者の定められた運命のようになった。

### 父の「自分史」

今年で「戦後80年」という。筆者はちょうど半分のときを国家防衛に従事したことになる。大東亜戦争は実体験がないので、それを振り返る報道などを見ることがあつても、正直なところピンと来なかった。だが、9年前に102歳で亡くなった父が書き留めた「自分史」を最近になって読み始め、父の眼を通して大東亜戦争の実相に触れることができた。

「自分史」の最初には「俊男（筆者の叔父、父の弟の名前）戦死 昭和18年11月20日ギルバート

おりた・くにお 昭和二十七年生まれ。四十五年に防衛大学校入校、四十九年に卒業後、航空自衛隊入り。F4戦闘機のパイロットなどを経て、航空幕僚監部防衛部長、航空支援集団司令官などを歴任。平成二十一年に退官。

諸島の空中戦で戦死 永久に忘れるな!!」と書いてあった。先述のように父は弟の戦死について、多くを語らなかつた。だが戦没者のことを決して忘れてはならないと繰り返し語っていた。また上京する際には、真っ先に靖国神社に参拝していた。

「自分史」には、弟について「永遠に子孫に伝えること」と遺言のように書いてある。今になって、もっと詳しく聞いておけばよかったと後悔している。ちなみに彼の靖国神社への合祀は、撃墜死から13年以上経った「昭和32年4月21日」である。

「自分史」をめくっていると、開戦当日のことが書いてある。

「昭和16年12月8日、真珠湾攻撃にて大東亜戦争に入った。報が入ったのは呉海軍工廠造機部組み

見える。

出征の日には、近所の人が大勢、出征祝いの幟や日の丸を持って駆けつけたが、その出征祝いの真っ最中に、出征取り消しの電報が届いた。電報には「出征の証を村役場に返納するよう」と事務的な指示が付け加えられていた。もらった饞別やお祝いを返しに行かねばならず、「みつともなく恥ずかしい思い」をしたとある。予定通り出征していたら、筆者は今、この世に存在していなかったかもしれない。

## 呉の空襲と原爆

その後、父は母と見合い結婚をした。昭和19年10月31日、窓には黒幕を張った灯火管制下、結婚披露宴が催されたが、「羽織、袴はよいが、提灯も光が漏れないよう

立場にて工作中。確か朝、この報が入って一同作業を止めて万歳を三唱したことが頭に浮かぶ。今思うにこのような状態(敗戦)になるとは夢にも思わなかつた」

開戦までの間、米国による石油、屑鉄の禁輸などの制裁によって鬱屈していた気分が一気に晴れ上がった。一般国民の精神状態はこうだったのだろう。

当時、呉に住んで海軍工廠に勤めていた父にも召集令状が来た。「昭和18年7月<sup>27</sup>日」とあり、「入隊は18年9月<sup>27</sup>日、場所は(長崎の)佐世保海兵団」とある。父はその時、海軍工廠での実習期間中で、所長が全員集合をかけて出征のお祝いと激励があった。

所長は「将来有望な技術者を養成する学校に入校中だから、召集は可能な限り避けることになって

にして嫁を迎えに行つた」とある。日本最初の特別攻撃隊が出撃したのは、この年の10月25日である。戦況は思わしくなく、国民の生活にもあらゆる面でシワ寄せが来ていた。「母が田舎に帰って食料調達し、心ばかりの宴でお祝い」「結婚式の翌日は平常通り脚にはゲートルを巻いて出勤」「新婚旅行などは思いも及ばぬ時勢であつた」とある。

新婚間もない昭和20年3月19日、呉地方大空襲があつた。父は出張中の横須賀で「呉市内は全滅」の報を受け、直ちに帰るよう命じられた。第一報が遅れたこともあるが、途中の要所が空襲のため、数日間かかつて「全市暗闇状態の呉駅に着く」。呉市は全滅、真っ暗な状態で方向も分からず、彷徨しているうちに交番に行き当

おり、間違つて召集令状が来たのかも知れない」とした上で、後ほど召集令状の解除が来るかもしれないが、「そうでなければ充分に働いてくるように」との激励を行つたとある。父は「目下激戦を戦っている時なので出征はしたかつた。心に迷いはなかつた」と記している。当時の平均的な若者の認識であろう。

入隊までの1カ月、父は実家に里帰りし、両親と世間話や当時の戦局の話をした。弟が戦死する3カ月前であり、深刻さはあまりなかつたのかもしれない。「母は食料を求めて、田舎まで買い出し」に行き、近所の近親者を招いて出征祝いの宴も催されたと記されている。「窓には黒幕を張つて室内だけの明かりで盛大な宴」とあり、厳しい灯火管制の様子が垣間

たつた。非常食のおにぎりをもらったが、「食べる気力もなく、少し明るくなつてきたところで家を探しに出た」という。

ようやく近所の人に出会つたところ、「父親(筆者の祖父)が心配して迎えに来て(実家の大三島に)連れて帰つた」と言われて安堵した。母は背囊を背負つて逃げたが、爆弾の火が背囊に燃え移り、投げ捨てて逃げたという。「嫁入り道具など全て灰と化した」ということは後に母から度々聞かされた。父と母は呉に戻つてからも、「また空襲があり手をつないで逃げたこともあつた」と書いてある。平和な現在では想像もできない戦時の様相が目に浮かぶ。

広島への原爆投下時の記述もあつた。「朝礼で防空壕から出た

時、爆風のような気圧で押され、身体がふらつくような気がした。皆で何事だろうと話している時、広島の方角を見たらものすごい煙が上がっている。広島陸軍火薬庫が爆発したのではと思った。その後「広島に通じる道路に血まみれになった多くの人が乗っているトラックが次々と通っていく。原子爆弾とは思ひもなかった」らしい。生々しい描写で当時の情景が思い浮かぶ。

## 大阪大を蹴って防大に

終戦後7年経ち、父は呉工廠での経験を活かし、三菱重工神戸造船所に就職した。兵庫県の明石市に引越すことになったが、筆者は生後6カ月で大三島を離れ、防大に入校するまで兵庫県の明石で過ごすことになる。

筆者の夢が防大に入って戦闘機操縦者になることであつたことは既に書いた。中学、高校と夢に向かつてまっしぐらに進んだが、世情は夢の実現に水を差すような状況であつた。

当時、ベトナム戦争反対、成田空港反対闘争、安保改定反対などで過激なデモや騒乱が日常茶飯事であつた。自衛隊は憲法違反の存在と見られ、防大を受験する、あるいは空自に入隊して戦闘機操縦者になるなどは、とても胸を張って語れる状況ではなかつた。筆者の高校は県立の進学校ではあつたが、日本教職員組合(日教組)の先生が多く、防大を受験すると言っただけで嫌な顔をされる。正直言って、友人にさえ筆者の夢を大げらに語ることはできなかつた。

防大受験に際して、内申書を書いてもらねばならない。たまたま担任の先生が海軍予科練を経験した人であり、快く引き受けてくれ、推薦状まで書いてくれた。日教組の先生が担任なら、防大に受験さえできなかつたかもしれず、幸運に恵まれた。

現行憲法を素直に読む限り、自衛隊は違憲の存在だと筆者も思っていた。しかし、両親は戦中派であり、戦争では大変苦勞したが、反自衛隊ではなかつた。筆者が子供のころから、国を守ることの崇高さ、人に尽くす美德などを、折に触れ聞かされた。自衛隊は違憲の存在だけでも、国家にとって誰かがやらねばならない不可欠で崇高な仕事だと防大受験を後押ししてくれた。

筆者のクラスは、理科系の進学

クラスで、クラスの約半分が大阪大学や神戸大学をめざしていた。防大の試験は秋に終わってしまうので、防大第一志望の筆者は、試験が終わると何もやることなくなつた。だがクラスの友達に勉強で必死なので遊んでくれない。仕方なしに一緒に勉強していた。

受験の時期を迎え、友達に付き合つて、大阪大学の受験に行ったら、たまたま受かつてしまった。高校の先生達は大喜びで、当然大阪大学を選ぶだろうと思つていたら途端に豹変した。先生達に囲まれて説教された。中学卒業後、3年間会つてもいながつた担任の先生にも呼び出された。口々に「私は君をそのように(右翼に?)育てた覚えはない」と。今風に言

えば、アカハラ、人権侵害、言葉による集団リンチであつた。

あの時、説教や言葉の暴力、集団リンチに負けて、進路を変えていたら、今の私はない。慕つていた先生達の豹変ぶりは、純真な青年の心を大いに傷つけた。そのショックは筆者の「戦後80年」の痛点として印象深く残っている。

今にして思うが、戦中派の両親は、国家観もしつかりしており、良識もあり、人間としても一級の人物であつた。筆者が今あるのは両親のお陰であり、感謝しかない。百二歳で天寿を全うした父は、律儀で真面目な大正人であつた。先述の通り、子供達に戦前の事をあまり語らなかつたが、晩年に話してくれたことがある。九十歳の誕生日のことだ。筆者を前に「もうそろそろ、ええじゃろう」

と切り出した。何かと思つてみると、「わしは戦艦大和を造つていたんじや」と語り始めた。どうやら呉工廠で戦艦大和の第二砲塔の油圧を担当していたらしい。筆者にとつても初耳であつた。大和建造について語り終えたあと、「戦艦大和については、家族にも一切話してはならぬと命ぜられていたんじや」と語つた。

筆者は大変驚いた。海軍からの命令を、戦後60年(当時)経つても律儀に守り通す。帝国海軍は既に消滅しているにもかかわらず、しかも戦後生まれの筆者に対しても箝口令を守り通すとは。最後に「わしももう長くないからな」とポツリと述べた。禁を破つた罪悪感からか、すこし寂しそうに見えた。筆者は、そこに美直な「大正人」を見た。先の大戦での戦没者

は圧倒的に大正人が多い。大正人の7人に1人が戦没している。戦後復興の原動力も大正人が主力だった。

父が最後に靖国参拝したのは、90歳台後半だったと思う。姉が明石から付き添い、東京駅から筆者が案内した。もう足腰は弱っていたが、杖を突きながら気丈に昇殿参拝を果たした。本人もこれが最後だと覚悟していたのだろう。参拝が終わった後の清々しい笑顔が印象的だった。杖を突きながら参道を歩いている時、父はボツリといった。「何で靖国参拝に反対するんじゃろうのお」と。筆者はとっさに答えられなかった。

### 誰が靖国問題に火をつけたか

国に殉じた英霊に対し、国民が尊崇の念を表し、感謝し、平和を

誓うのは世界の常識である。米国ではアーリントン国立墓地に、韓国ではソウル国立墓地（国立顕忠院）に、フランスでは凱旋門の無名戦士の墓に、国家のリーダーが国民を代表して参拝する。外国の要人来訪時も、先ず参拝し献花する。これが国際常識だが日本だけが違う。

平成25年12月26日、当時の安倍晋三首相が靖国参拝して以来、現職首相は参拝していない。日本は何故、国際常識に沿ったことができないのか。父の素朴な問いかけである。昭和60年までは、首相が毎年、靖国神社に参拝していたが、この事実を知る人も少なくなかった。現在の石破茂首相は戦後36人目の首相であるが、「戦後80年」で15人の首相が計68回参拝している。昭和26年10月、秋季例大

祭には吉田茂首相以下、閣僚、衆参両院議長が揃って、戦後初めて公式参拝し、サンフランシスコ講和条約調印によって日本が再び独立できた旨を英霊に報告している。

中国が突然、靖国参拝を許さないと言い始めたのは昭和60年のことである。中国は、極東国際軍事裁判でのA級戦犯が合祀されていることを理由に、首相の公式参拝への激しい非難を繰り返すようになった。だが明らかに不自然である。A級戦犯14人が「昭和殉難者」として靖国に合祀されたのは昭和53年10月17日である。翌年春の例大祭前（4月19日）にそれが報じられたが、中国は全く反応していない。

A級戦犯合祀報道の2日後、キリスト教信者を自認する大平正芳

首相が例大祭に参拝したが、中国は何の反応も示さなかった。翌5月、時事通信の取材に応じた中国の最高指導者である鄧小平氏は、靖国参拝にも、A級戦犯にも触れていない。しかも大平首相は同年12月、中国を訪問し熱烈に歓迎された。2年後の昭和55年、終戦記念日に鈴木善幸首相と共に閣僚が大挙して参拝したが、抗議も何もなかった。

問題にしたのは、実は日本メディアである。朝日新聞を筆頭に左翼メディアが、靖国への公式参拝を政教分離や歴史認識などから問題視した。そして卑劣にも中国に「御注進」し、中国は「靖国」が外交カードとして使えることを知った。それに韓国が悪乗りした。

昭和60年8月14日、中曽根内閣は、公式参拝は政教分離には反し

ないとの政府統一見解を出した。翌日、中曽根康弘首相は閣僚を引き連れ、首相公式参拝に踏み切った。メディアはこれをヒステリックに非難し、中国に再び「御注進」した。中韓両国は騒ぎに呼応する形で、靖国参拝を強烈に非難し始めた。中曽根首相は、これを最後に首相在任中の参拝を止めた。彼は「靖国参拝により中国共産党内の政争で胡耀邦総書記の進退に影響が出てはまずいと考えた」と述べている。だが中国、韓国の圧力に屈し、両国に外交カードを提供した罪は重い。

中国研究専門家のペンシルベニア大学名誉教授のアーサー・ウォールドロン氏はこの動きを鋭く見抜いていた。彼は語っている。

「中国共産党にとっては真の狙いは、日本の指導者に靖国参拝を

止めさせることよりも、日本の指導層全体を叱責し、調教することなのだ。自国の要求を日本に受け入れさせることが長期の戦略目標なのだ」

日本政府は愚かにも、靖国参拝さえ止めれば中国、韓国の難癖は終わると判断した。中韓両国にとって靖国はこの上ない外交カードだから、終わるはずもない。ウォールドロン氏は述べる。「靖国は大きな将棋の駒の一つにすぎず、日本がそこで譲歩すれば、後に別の対日要求が出てくる。最終目標は中国が日本に対し覇権的な地歩を固めることなのだ」と。残念ながら氏の予言は見事に的中した。

南カリフォルニア大学のダニエル・リンチ教授も述べている。「中国は近代の新アジア朝貢システムで日本の象徴的な土下座を求

めている。アジアでの覇権を争い、唯一のライバル日本を永遠に不道徳な国としてレッテルを貼っておこうとしている」。中曽根の譲歩は、中国の思う壺だった。

昭和20年、日本を占領したGHQは、靖国神社を焼き払いドッグレース場を建設しようとした。この時、靖国神社を護ったのは、ローマ教皇庁代表であり上智大学学長（当時）であったブルーノ・ビッター神父であった。彼はマッカーサーに対し次のように語ったという。

「いかなる国家も、国家のために死んだ戦士に対して、敬意を払う権利と義務がある。それは戦勝国か、敗戦国かを問わず、平等の真理でなければならない」「我々は、信仰の自由が完全に認められ、いかなる宗教を信仰する者で

あろうと、国家のために死んだものは、すべて靖国神社にその霊が祀られるよう、進言するものである」

彼の進言により靖国神社は焼き払いを免れた。父が人生最後の参拝で漏らした一言、「何で靖国参拝に反対するんじゃないの？」ほど重い言葉はない。

靖国参拝反対はメディアが作り上げた茶番である。このまま茶番が続けば、確実に日本人の精神は荒廃し、時間が経てば経つほど、日本人のモラルは低下し、国家意識は溶解していく。「国のために命を捧げた英霊を慰霊、顕彰するのは当たり前的事。外国が口を差し挟むべきことではない」と言えない日本は衰退の一途を歩みつつある。

祖国と家族を護るため、命を懸

けた英霊に感謝の誠を捧げ、追悼、顕彰するのは国民の責務である。靖国神社を去る時、父が言った一言が胸に突き刺さる。「国を護るために戦死した人たちを決して忘れちゃあいけんよ」

## 中国軍大佐の言葉

約30年前のことである。筆者が航空幕僚監部で勤務していた時、日中防衛交流で北京を訪問した。陸海空の3人の自衛官（1佐）と一人の若手官僚、そして外務省、防衛庁（当時）の二人の局長という陣容であった。

昼間の行事が終わり、夜の宴会になった時、そこに参加していた中国人民解放軍の陸海空の大佐が約10名程度のうち、空軍の大佐が筆者に近付いてきて、航空自衛隊の領空侵犯措置について語り始め

た。筆者は、彼が日本の法律、特に自衛隊法について知悉していることに驚いた。筆者が戦闘機パイロットだというのもちゃんと調査済みだったようだ。彼はグラス片手に「我々（中国空軍機）が尖閣を領空侵犯しても、空自は我々を撃てないだろう」と挑戦的にきりだし、その根拠や、自衛隊の弱点について滔々と語った。筆者が相槌も打たず、返事もせず、彼の眼をじっと睨んでいると、筆者の無反応に根負けしてか、「でも空自は撃つだろうね」と言う。筆者が「貴官は何故、そう思うのかね」と聞き返すと、大佐は一言、「日本は特攻隊の国だからな」と述べた。筆者がイエスともノーとも言わず、ニヤリと笑うと、大佐は話を変えた。

その時、ハッと気が付いた。

「そうか、尖閣は特攻隊員が護っているのだ。日本国は今なお英霊が護っているのだ」と。いまだに英霊がこの国を護っている現実を思い知らされ、我々が独自で自国を護れない不甲斐なさ、英霊への申し訳なさを覚えたことを鮮やかに覚えている。

それから約10年が経ち、筆者はイラク派遣航空部隊指揮官を命ぜられた（本務は航空支援集団司令官）。その関係で何度も中東に赴く機会があった。中東各国で軍の最高指揮官を表敬した際、異口同音に出る話題が、日露戦争であり特攻隊であった。他の軍高官との話題も、事前に申し合わせたかのように日露戦争勝利であり、特攻隊の犠牲的精神だった。日本を大変りスペクトルしており、彼らは自衛隊をその末裔として見ている。

イラク派遣の約5年間、お陰で自衛隊に対しては非常に敬意をもって接してくれ、良い思いをさせてもらった。

「戦後80年」は日本のために尊い命を捧げられた英霊たちによって護られてきた80年であった。英霊のお陰で平和を享受し、奇跡と言われる戦後復興を成し遂げ、先進国の仲間入りをすることができた。自衛隊も英霊のお陰で一目置かれる存在になり、抑止力を担っている。我々は靖国神社に足を向けて眠れない。英霊たちに感謝し、亡き父が言ったように「一時たりとも忘れちゃあいけんよ」なのである。もうそろそろ我々も独り立ちし、英霊にはゆつくりとお休みいただかねば申し訳ない。不甲斐なさにため息が漏れる「戦後80年」なのである。